

平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

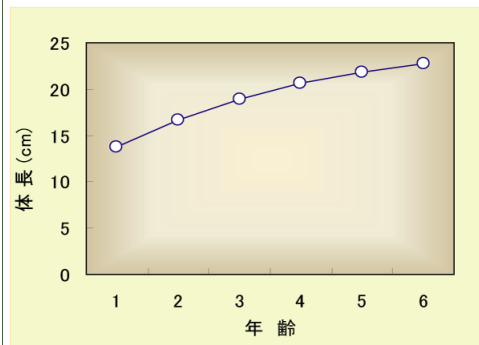
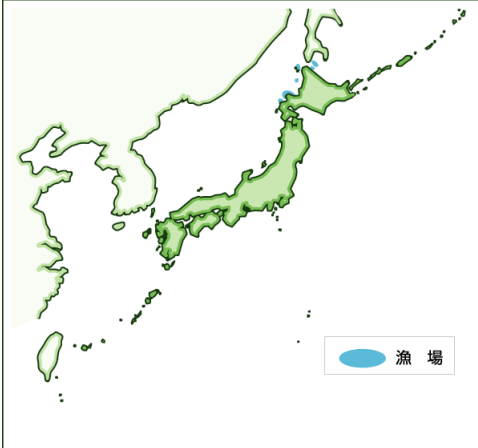
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬～5月上旬)で、稚内、枝幸および利尻・礼文周辺の沿岸域、キタイカナゴが初冬(11月下旬～12月)で、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40～80mで、底質が砂礫の海域

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類など

捕食者: マダラなどの大型魚類、海鳥類、海産哺乳類

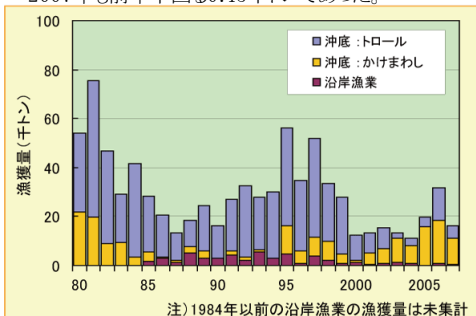


漁業の特徴

宗谷海峡周辺海域に分布するイカナゴ類には、イカナゴとキタイカナゴ2種が含まれているが、漁獲物ではこれらが区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(沖底)によって漁獲されている。沖底は6～9月に1～6歳魚を漁獲し、沿岸漁業では4～7月を中心に0～3歳魚を漁獲している。なお、沖底漁業は養殖用餌料としての需要を考慮しながら行われる。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示し、1995年に52千トンに達した。その後は減少傾向に転じ、2000年代に入ってから10千トン～20千トンの低い水準で推移していた。2006年の漁獲量は前年を大きく上回る31千トンであったが、2007年には16千トンと前年比約50%減となった。沿岸漁業も2000年以降0.15千トン～1.2千トンの低い水準で、2007年も前年下回る0.45千トンであった。



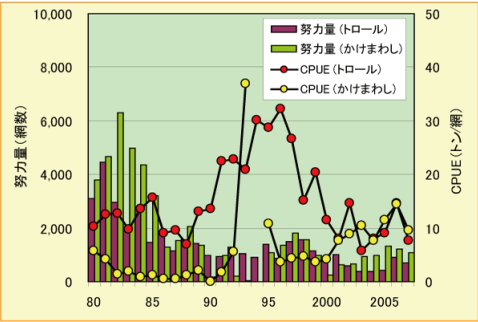
資源評価法

主要漁業である沖底の漁獲量は、需要を考慮して行われるため、資源水準を反映していない。またCPUEも、本資源が日本～ロシア水域に広く分布するため、資源全体の水準を反映しているかは不明である。また、減船、漁場の縮小、かけまわしとトロールの漁獲量の逆転などの影響で、長期的な資源水準の比較は困難である。そこで、トロールの努力量が比較的安定していた1985年以降のCPUEを用いて評価を行った。

資源状態

トロールのCPUEは1990年代に入り増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の32.3トン/網に達した。1997年以降は減少傾向に転じ、2003年には1980年以降最低の5.8トン/網となった。2006年は近年での高水準である14.7トン/網であったが、2007年には7.7トン/網と大きく減少し低い水準となった。漁獲物の体長組成からみて、近年は1992年級のような豊度の高い年級群は出現していない。2006年の漁獲はこの2004年級に支えられていたが、2005年級は豊度が低いものと推定されており、今後の資源動向は若齢魚の加入次第である。以上のことから、資源水準は低位、動向は不明とした。





管理方策

イカナゴ類の資源水準の低迷は、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられる。2004年から資源回復計画の対象種となり、稚内のトロール船2隻が減船された。しかし、2006年のトロール漁獲努力量は前年比約2倍まで増加するなど、トロールの漁獲努力量は必ずしも減少していない。また、かけまわしの努力量は、2003年以降、1,000網前後で推移している。しかし現在の漁獲努力量は1980年代に比較すると低く、現状程度であれば資源を急激に悪化させる状況ではないと考えられる。ただし若齢魚の加入状況が不安定であるため、CPUEの著しい低下等が見られた場合には漁獲努力量の削減を講じる必要がある。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化があり、近年の沖底のCPUEが資源全体の水準を反映しているかは不明
- 1985年以降のトロールCPUEの動向を中心に判断して資源水準は低位
- 資源動向は若齢魚の加入状況いかにんであるが、近年不安定になってきており、動向は不明

管理方策のまとめ

- 加入状況が悪化し、CPUEの更なる減少等が生じた場合には漁獲努力量の削減を講じる必要あり
- 北海道では、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした

資源評価は毎年更新されます。